「イワン？」
ジョーが博士と出かけた後、急に静かになったゆりかごの中が気になって、フランソワーズはそっとのぞいてみた。
ミルクを飲んで落ち着いたのか、さっきまでぐずっていた赤ん坊はすやすやと眠っている。
「…まさか、夜の時間？」
カレンダーを見る。だいたいイワンの眠りの周期は把握しているつもりでも、時々は数日ぶれるときもある。この眠りがそうだとすると、今回はいつもの周期からすると6日も遅れて『夜の時間』に入ったことになる。
「もう、ここ何日も人を眠らせないでさんざん泣きわめいたくせに！」
えい、とフランソワーズはささやかな復讐代わりにイワンのほっぺたを強めにつつく。ぐっすり眠っているせいかイワンはぴくりともしない。
「でも、寝てたらかわいいのよね」
この赤ん坊らしくない赤ん坊とは長い付き合いになるけれど、そのあどけない寝顔には自然に微笑んでしまう。しなければいけない仕事があるというのに、フランソワーズはつい、イワンの寝顔に見入ってしまった。
しばらくしてからイワンの掛け布団を直して、彼女は静かに部屋を出てドアを閉めた。

＊

朝早く、ギルモア博士が学会のためにドイツへと出発していった。
今回の目的はそれ以外にも、向こうで旧知の知人と会って、彼から最先端の人工臓器についてレクチャーを受けるという予定になっていた。
しかしその学会がらみで何やら不穏な話があり、今回博士に同行したがっていたイワンは、安全のために日本で留守番ということになってしまった。おかげでここしばらく機嫌が悪い。
ボディガードとしてジョーが付き添っていく予定になっていたが、行き先がドイツのアルベルトの居住区近くだとわかって、彼が代わりに現地で同行してくれることになった。
それならば、と安心してジョーはアルベルトに細かい情報を伝え、自身は出発当日博士を見送りがてら空港まで送っていった。

車の中で今後の予定を話して、博士は空を仰ぐ。
「やれやれ。何だか面倒なことになってしまったのう。わしのわがままでジョーやアルベルトに迷惑をかけてしまうな」
「何をおっしゃってるんです。気にしないでください。イワンの予測では、空港ロビーで何も無ければ次に危ないのは学会の会場だそうです。空港は僕がガードしますし、向こうに行ってからのことはアルベルトにも全部伝えてありますから、安心してください」
「頼りにしとるよ」
「でも、イワンはおとなしく家にいますかね」
その言葉に思わず博士は背後を振りかえる。
「荷物に紛れこんどるとでも？」
「いえ、先にドイツに行っていたら、と思って」
それを聞いて博士は笑いだした。
「まあそうなったらそのときじゃ。
とはいっても、あの子は夜の時間に入る時期だしな。わしに無理やりついて来ても、向こうで結局寝て過ごして終わるんじゃ仕方ないじゃろう」
車を降りてスーツケースを持ち、ジョーが博士と共に空港ロビーに入ったときだった。
中途半端な時期とはいえ、旅立とうとする人々で空港内にはそれなりに活気があふれている。フランソワーズを連れてくるべきだったかもしれない。そう思いながら、ジョーは周囲の様子に気を配っていた。
「すみません、通してください」
大声で言いながら、人ごみをぬって非常に大柄な青年が大きなスーツケースを引きずりながら早足で歩いてきた。その巨体のあまりのインパクトに、周囲の人々も道をあけている。
「ほほう、ジェロニモとどちらが大きいかのう」
思わず博士が漏らした言葉にジョーも失礼だとは思いながら、つい相手をじっと見つめてしまった。
「うーん、ジェロニモ…ですかね」
そんなことを言っている間に彼が近づいて来たので、邪魔にならないよう端へ移動しようとしたとき。
待ち時間に飽きたのか、そのあたりでふざけまわっていた子供が転んで、その青年の前に倒れこんだ。慌てて子供を避けようとして彼はスーツケースの重さに引きずられ、バランスを崩してよろけた。
その巨体とスーツケースが、こともあろうに正面から博士に倒れこんでくる。
（！）
これは例の妨害かとジョーが身構え、周囲の状況を瞬時に確認した。
まず博士を直撃しようとしている大きなスーツケースを被害の少なそうな方向へと蹴り飛ばす。